波濤

第5号

発　行　放送大学同窓会
　　神奈川学習センター支部
編　集　総務委員会
責任者　岩間　吉男
発行日　平成5年2月26日

福祉は人間そのものを全体的に見据えたもの

去る十一月一日（日）、相模福祉村理事長の赤間氏をお招きして座談会を開催しました。テーマの「福祉と行政」に寄せられた関心が高く、大変大勢の方にご出席頂き、予定時間を大幅にオーバーする熱心な話し合いを持つことが出来ました。赤間氏よりお話頂いた福祉の現況と対策について要旨を報告いたします。

現況

神奈川県内で現在寝たきりと一人暮らしの老人は合わせて六万人（うち寝たきり老人は約二万五千人）、特別養護老人ホームのベッド数は約六千、ホームへの入居希望者が多く一年待ちは普通である。世の中のひずみゆがみが多く、弱者が社会の片隅に押しやられているのが現状である。

対策

（県）・老人用アパートへの補助金を考えている
・特別養護老人ホームを平成五年に建設
・ケアハウス構想、西暦二000年迄に二百戸建設（住宅に困る人、ケアが必要な人が対象）
・老人保健施設の設立
（国）・五年前からの厚生省の福祉対策（地域福祉ゴールドプラン）
（赤間氏）・ケアハウスの建設（百四十人程を収容）
・日本の福祉の在り方を変えて一つの流れを作りたい

非常に厳しい福祉の現況を見据え、宮城弁でユーモアをまじえ語られる赤間氏の建設的な福祉論に触れ、一同前途に光明を見る思いがいたしました。続いて次のような意見交換が行われました。

○十八才迄の肢体不自由児はまだ良いが、それ以上の年令になると行くところが少ない。
○ボランティアの広がりを考えたらどうか。
・カード、利用券、ボランティア貯金等有償
・あくまで無償で
・ボランティア教育の必要性
○行政側のプランに対する責任の取り方はどうなっているか
・官僚のみに福祉を任せられない
○ホームヘルパーを公務員に昇格して欲しい
○これからはライフサイクルを考えていかねばならない

以上、大変内容の濃い話し合いをすることが出来ましたが、今後とも一人ひとりが、福祉を自分自身の生の問題として深い関心を寄せていかなければならないのではないか、またその延長線上で時には様々な形で行政に参画していく必要も生ずるのではないだろうかという感想を持ちました。更に、その全過程で各々立場の異なった人々が同じテーブルについて話し合っていけたら、実効のある対策が得られるのではないかという思いがしました。

最後になりましたが、お忙しい中をセンター迄お越しくださり、数々の含蓄あるお話をして下さいました赤間氏に厚く御礼申し上げますとともに、益々のご活躍とご健勝をお祈りいたします。

尚、今回の座談会について赤間氏に御寄稿頂きましたので次頁でご紹介いたします。

（企画委員会　小川みのり）

「福祉と行政」

社会福祉法人　相模福祉村理事長
赤間一之

放送大学の名称については承知はしておりましたが、どこか遠い思いで考えていたことをまず初めに告白しておきます。しかし、縁があってOBの勉強会にお招きを戴き皆様に接して放送大学の置かれている立場を知り、そこに学んでいる人々の激しい意欲を感じて認識を新たにしました。

私に与えられたテーマは「福祉と行政」というものでした。私は福祉現場の末端におるものとしてテーマの大きさに当初戸惑いもありましたが、末端から見た日本の福祉さらには福祉先進県といわれる神奈川県の諸施策を語り、そこから賢明なるOBの方々に"福祉"の現状を理解していただこうと思いました。

だが、私のこの考え方は誤りであったことにすぐ気付きました。と申しますのは放送大学には福祉コースまであってOBの多くは「福祉学」に深い造形があったからでございます。現状の福祉学をいわば、専門家に素人が説く「シャカに説法」の感がなきにしもあらずであった訳でございます。

ただ、私は現状の「福祉学」に多少の疑念を持っているだけに勇を鼓舞して持論を展開した訳でございます。

私は基本的に福祉は富者が貧者に対するものではないこと、まして一握りの障害者やこれから増加し続けるであろう高齢者だけのものではなく、福祉とは人間そのものを全体的に見据えたものでなければならないと考えております。いわば人間生活そのものが福祉という"生活福祉"でなければならないと考えております。

勿論、この考え方については色々異論のあることだろうとは思いますが、富者貧者も、まして障害者や高齢者も、生活福祉の範疇に入るものだと確信しております。

私はそのような思想に基づいて施設づくりをはかり、施設と地域の連携、更にはそれらをフォローした街づくりを展開してゆかねばと考えて今日まで運動し続けてきた訳です。

現在は地域福祉づくりが先行して施設があたかも"悪"であるかのような極端な考え方もございますが、それら全体を整合性を求めながら形成してゆくことが肝要と考えているのでございます。

勿論、私がこのように話したからと言って、私の諸プランが全体的に考えどおりに進捗しているのかと問われれば「ノー」と答えざるを得ない。ただ、私の思想に基づいて大きな目標に向かって一歩一歩努力しているというのが実状であります。

初めは二人で始まった「相模福祉村」という村づくりは、今では五百人余の仲間で進める運動になったことを付け加えて、意はつくせないが私がOBの方々と話し合ったおおよその大要を紙面でお伝えしたものであります。

放送大学卒業後の新たな人生

今回は、放送大学を卒業されてからの生活を、三人の方に書いていただきました。皆さんしっかりした足取りで頑張っておられます。

卒業後の活動について

大垣　昌枝

この標題をいただいて、さて困ったという感想が本音である。と言うのは卒業後と言われても、そのまま再入学して現在も学生を続けているため、卒業したという実感が全くないからである。

「ボランティア活動をしている事実をそのまま書けばよい」と関係者の方に言われたが、私の場合は卒業論文を書くためにボランティア活動に踏み込んだのでどちらかといえば純粋なボランティア精神から始めたものではない。だから大変後ろめたいのである。

今から約五年前に、登校拒否児を見守る親の会で、通称「金の星」という会が横浜にあることを新聞紙上で知り、卒論のテーマに登校拒否のことを取り上げようと考えていた時期だったので、この会に出席してみれば親の様子や子供の事等が分かるのではないかと考え、出席してみることにした。

しかし、いざ例会に出るとなると、紹介もなく、その上に単独でと言うのはいくら中年のオバサンの大きな心臓でも、相当に勇気がいるものだった。

例会に二度三度と参加してみると、長い間登校拒否を続けている子の親は、すっかり落ち着いて新しく、入会してくる親のカウンセラー役をしているのに気付いた。また、新入りの親はこの会で自分の子供の事を話すと、気持ちがスッキリして精神的にホットする様子がはっきりとわかってきた。

どうしてこうなるのか、その原因を色々考えてみた。つまり、学校は子供のことを考えて（必ずしも子供の為にはなっていないようだが）いろいろやっているが、親の事までは力が及ばない。そして親としては言いたいことがあってもなかなか言いにくい。だから親が精神的に安定を保つために、遠慮なく声を大にして学校や先生の悪口を言えて、親が安心して泣ける場所がこの会なのだということが分かった。

そこで私は、こうした親の言い分を聞くためにはカウンセリングの勉強が必要だと考え、横浜ボランティア協会が催したカウンセリング講習会に参加し、カウンセリングの基礎を勉強した。

その講習会で得たことは、私が頭のなかで理解していたカウンセリングとは相当に違っていたのである。

カウンセリング理論に基づいて行われる実際のカウンセリングとは、相手の立場、相手の気持ちになって、相手の言い分を聴くことに撤することを学ばせてもらった。

この講習会で学んだことは私のカウンセリング理解の原体験となり、現在でもあらゆる場合で活用している。

さて話は標題に戻るが、「金の星」で得た知識は教科書からは得られない、常に新しい、現実に起こっている貴重な事例ばかりだった。そうしてその事例を卒論に使わせて頂いて、卒業したらそれで終りにするのはあまりにも勝手すぎるのではないかと私には思われた。

その頃「金の星」の親にも変化が起った。登校拒否から立派に立ち直り、一人前の社会人となった子供も多くなり、そうして親は会を離れていくようになったからである。つまり登校拒否児にも世代交代の時期がきたのである。

しかし、問題を抱えている親達も多く「金の星」を解散して、そのまま放り出すことはできない。そこで「宇宙船」という会を作り、親たちが月に一度集まり「登校拒否」について勉強しながら、お互いに悩みを解決して行く場として新しい出発をした。そのメンバーに私も加え

ていただいている。その「宇宙船」の機関紙をワープロで作成する仕事が私のボランティアとしての担当である。

例会に出席する度に、会員の親子の喜怒哀楽が肌身に伝わるようになり、新入会員の気持、古い会員のこと等がいつも頭の中にある。

ボランティアとは言うまでもないが簡単にできるものではない。その都度変化する会員の様子を観察しながら、適切な言葉を相手に伝えなければならない。そのためには私自身も常にカウンセリングの勉強をする必要があるので、今でも朝日カルチャーセンターのカウンセリング講座出身者が集っているC. H. R.（Creative Human Relation）研究所へ通って、カウンセリング、特にピアカウンセリングについて勉強している。

また、心理学関係の取得単位が心理士認定の基準を満たしたので、心理士認定学会に認定申請をしたが、認定委員の諸先生方に放送大学の内容があまり知られていなかったのか、面接授業内容を詳細に知りたいとの連絡を受け、現在のところ認定は保留になり残念でならない。一日も早く大学の実態が社会一般に知られることを願っている。またそうなれば、ボランティア活動も行いやすくなるであろう。

社会福祉に頑張っています

細川　博

『光陰矢の如し』とはよく言ったもので、放送大学の卒業後もう二年余が過ぎました。

卒業後、社会福祉士養成所（通信課程を受験して不合格になり失意の頃、仲村先生から「社会福祉士の資格は新しくできたばかりで、現役の福祉専門職に資格取得の希望者が多く、現在三百名の定員に二千名の申し込みがあり、現役にどうしても有利になるから、君も現在の無職でなく何か福祉の仕事をやりなさい」との助言を頂き、その秋に鶴巻温泉病院の看護助手（リハビリ搬送）に就職して、再度入学選考に挑戦したところ幸運にもこの三月合格通知を得て、念願の社会福祉士へ向けての養成過程の学習に入りました。

入学して驚いたのは、ダンボール箱入りの社会福祉士養成講座全十五冊（法学・社会学・心理学・社会福祉原論・社会保障論・児童福祉論・障害者福祉論・老人福祉論・公的扶助論・医学一般・介護概論・地域福祉論・社会福祉援助技術総論・同援助技術各論Ⅰ・同Ⅱ）及び社会福祉援助技術演習の合計十六冊が送られてきたことです。この教科内容は入学申し込みの際に承知はしていましたが、こんなにまとめて目の前にしては驚かざるを得ません。しかし内容をよく見れば、私達が既に放送大学で学習した科目や、関連科目が多数あるのではないですか。これならと少し落ち着きも出てきて、改めて放送大学での勉強がどんなに大切だったかを痛感した次第です。

社会福祉士について少し述べましょう。社会福祉士の仕事は専門的な知識や技術を必要とするばかりでなく、自分自身の人格を援助活動の道具・手段として活用する高度な専門性が必要とされます。例えば病気を完治するには、専門的な知識や経験をもつ医師や看護婦の援助が必要な様に、社会福祉の持つ生活障害の多様さは、これを利用する人達自身の力では困難な場合が多いので、これを社会福祉士があくまでも利用者側に立ちながら、利用者みずからの自立に必要な専門的諸サービスを選択し、それを一定の仕方で組合せ、活用していく過程をその側面から援助していくのです。またこの利用者はその多くが社会的弱者であり、サービスについての権利意識も高くない現状では、社会福祉士が利用者との人間関係に留意して、優れた人権感覚を養い、憲法二十五条に示された利用者の生存権を保障しなければなりません。

それに援助を提供する側の価値観で利用者を見るのではなく、あくまでも利用者をあるがままに、受容しなければなりません。

専門職としての権威は、利用者と平等の関係を結び、かつ信頼を得るところに成立します。援助で一番大切な人間関係は、この信頼関係から生ずるのです。

現在、社会福祉士は「名称独占」に止

まっていますが、この資格取得により、社会福祉の専門家として求められる知識や技術について、その人物が一定の水準以上にあることが証明され、今後、社会福祉各般に亘り専門性をより向上させ、我が国における社会福祉の将来に、計り知れない影響を与える事になるとおもいます。それだけに現在の様に厳しい資格の取得条件があるのでしょう。

社会福祉士になるためには、全て国家試験に合格しなければなりません。この受験資格が厳しく、福祉系大学で指定科目を履修した者を含めて四ルートが直接受験できるだけで、一般大学卒業者は指定の養成施設等で一年以上の履修が必要になり、他の数ルートもこれに準じます。こうしてやっと国家試験を受けても合格率二十％の難関ですから、私など今のところさっぱり自信もありません。でも福祉を理解する将来性ある若い人には、この資格は是非取って今後の高齢化社会に向けて大いに活躍して頂きたいものです。

放送大学の卒業資格を、こういう方面に活用するのも一法ではないでしょうか私の年令では看護助手をやりながらの学習は難しいと感じ、五月末に今の肢体不自由児の療護施設「精陽学園」に移りました。園長のご配慮で週六日の半日勤務とし、現場実習やスクーリングには休むことも快諾され、仕事も学園の車輛運転と清掃に決定しました。

毎朝、小中学生を車で学校へ送り、職員の引継ぎ会議にも出て勉強させて頂き園内の清掃を済ませ、昼食後は市立図書館に直行して学習しています。今ではすっかり学園に馴染み、子供達ともよい関係ができました。

学園の仕事が私自身の生き甲斐となり花壇づくり等の環境美化に真剣に取り組み中です。

学園行事のキャンプ・バザーにも参加し、職員親睦のソフトボール・ボーリング等にも若い職員に負けじと活躍？しております。

先般、現場実習がサガミ緑風園で実施されて、月火水を実習、木金土を学園で、と四週間を頑張り無事終了しました。これまで毎月のリポート提出に追われてきましたが、スクーリングが十二月中旬と決定し、そのまとめになんとも忙しい今日この頃です。

（この原稿は十一月下旬に書いて頂きました）

専攻特論のテーマが導いた就職

市村　恭子

私にとって放送大学の専攻特論は、その後の人生を大きく変えてしまいました。

丁度テーマに迷っている頃、義父が倒れ私も介護を担う立場になりました。そこには、家族形態の変化による核家族化入院に伴う経済的負担、介護者自身の高齢化等が山積みし、家族だけで老人を看ることの難しさを私は実感したのです。まさに老人問題が緊急を要する現実問題として我が家に迫ってきた時、テーマが決まりました。それは「老人のノーマリゼーションと在宅福祉」でした。老人はどんな状態になっても自分の家で過ごしたいのです。また、家族の持つ福祉機能には他では代替できないものがあります。

地域での在宅支援システムを知るために参加した「介護者の会」では、ほとんどの介護者が交代してくれる人がなく、疲れはてていました。それでも尚、何とか「在宅」を継続したいと願っていたのです。在宅ケアを定着させるためには、介護者自身がノーマルな生活を維持できる様に、地域ぐるみの支援が不可欠です。

これらのことをまとめて特論に書き上げた一年後の平成三年四月、大和市に「老人保健施設・さくらぷらざ」が開設されたのです。厚生省は「老健施設」を「病院と特養の長所を持ち寄り、医療と福祉のサービスが一体となって提供され、家庭復帰を目的とした中間施設」と謳っています。この施設こそ、私が「在宅ケア」を可能にするために求めていたものであり、また、ほとんどの介護者が望んでいるものだと思います。

今、私はこの施設に就職し「デイ・ケア」を担当しています。利用者のほとんどは疾病を伴い、半数以上の人に痴呆が認められます。しかし、一人ひとりに「キラリ」と光る瞬間があり、彼らの中に深い叡智を見ることができます。これらの発見が、私の明日への原動力となっているのです。

三十年以上家庭に閉じこもっていた私の目を、社会に向けさせたのは特論研究でした。

ご指導くださった仲村教授に感謝！

十三人火曜日

小川　みのり
（放送大学本部　施設見学会）

十月六日（火）晴天の良き日、放送大学本部の施設見学をしました。平日であることから参加者はちょっと寂しい十三名でしたが、説明して下さる声が隅々まで届く贅沢なグループ編成ではありました。修学指導課の中村さんのお迎えを受け、広報室の栗岩さんのお話を伺ってから、放送局、スタジオ、学習センター、セミナーハウス、図書館、の順序で見学しました。

放送局の中央には一インチ幅のオープンリールVTRがバックアップ用と共に二個ゆっくりと回転しており、このテープから目下放映中ということで、いきなり臨場感を満喫しました。テープのストック棚が完全にオートメーション化されていて、ボタン一つで必要なテープを取り出せる様子にすっかり感心した後、使用済みの大道具を保管してある倉庫をきょろきょろしつつ通過して、スタジオが見下ろせる二階へ。

この日も、二つのスタジオ共録画撮りで緊張感が漂っていました。テープを録画するには、練習ー本番ーチェックまでを同日中に終わらせなければいけないので、一日に二本録画撮り出来れば良いほうだそうです。色美しく紅葉した花みずきと白い椅子とがロマンチックな雰囲気を醸し出している中庭を愛でながら、学習センター、宿泊施設のあるセミナーハウスへ。

この建物も大変充実した施設で、是非有効利用したいという思いが皆の胸に沸き上がったことでした。「ここはディズニーランドに近いわね」等と横道に逸れているのは誰？

教授の方々の利用にも耐え得るという図書館。ふかふかの絨毯の上に歩を止めわざわざ難解そうな本を開けてみます。人影は・・・二、三。この図書館が我が家の近くにあったら、と複数の声があがりました。

全体的に、施設が立派な上に清掃がよく行き届き、とても清々しい印象を受けました。本部の職員の皆様、快く迎えて頂いて本当にありがとうございました。一同、胸を暖かくして帰途につきました。途中ひと休みして、この充実感を語り合ったのは言うまでもありません。

ピラールちゃんへの手紙

グァテマラのピラールちゃんへは昨年秋、こちらから次のような手紙を出しました。

ピラールちゃん、こんにちはお元気ですか。このあいだはお手紙とかわいいスヌーピーの絵を送ってくださってどうもありがとう。

ピラールちゃんが勉強好きな女の子だと伺ってとてもうれしく思いました。

というのも私達も皆勉強好きだからです。

今日は日本と横浜について少しお話しいと思います。

日本は主に四つの島から成っていて、国土は山地が多く平地は少ないです。でも、平地に住んでいる人の方が断然多いです。

私たちの学校のある横浜は一番大きな島、本州の太平洋側にある港都で、日本の六大都市の一つです。中心部には高い建物が沢山あって緑は少ないのですが、郊外にはまだ森や畑が残っています。そして今は秋なので、木々が美しく色づいています。

では、今日はこれくらいにしておきます。お元気でお勉強やお手伝いをして下さい。みんなで応援しています。

さようなら

（片山　洋子）

また、ピラールちゃんとソムチャイ君から手紙や絵が送られてきていますので今後ご紹介できる機会もあると思います。

これらの交流を通して、お互いの理解と関心が個人から国にまで拡がればと思っています。

フォスタープラン実行委員会では当初の予定通り、昨年夏二人目のチャイルドを申し込み、グァテマラのピラールちゃんに続いて、新たにタイのソムチャイ君（七歳男子）が私たちのフォスターチャイルドになりました。

そこで、皆様にお願いですが、払込通知票を同封しますので、フォスタープラン（F・P）の趣旨にご賛同の上、ご協力頂けますようお願い申し上げます。

おばさん　キットピークへ行く　（その一）

小山　佐枝子

今年の冬は暖冬と言われ、ストーブなしでもいられるほど温かい日が続いていたのが、何故か十二月五日の夜半から雪が降りだし、東京、横浜で積雪三cmを記録した寒い六日の朝、大きな旅行カバンを持ち成田へ向かった。

我が放送大学では年に数回海外研修旅行を行なっており、今回は「アリゾナの天文台と自然研究」と題した研修旅行が行なわれた。講師に小尾信弥放送大学教授を迎え、学生、学校側関係者など三十人が参加し、八日間の研修旅行であった。我が家では主人と二人の子供をおいて私だけの参加となり、男三人を残し八日間も留守をするのは始めての事なので、とても気になったが、理解ある（？）主人の言葉で、今日の旅立ちとなった。二人の子供には火の始末、戸締りのことをよく注意し、くれぐれも主人を餓死させないように頼んで私は機上の人となった。

機内の楽しみは、夕食の後で水割りを飲むこと（何という贅沢）、さっそく飲んでいると小尾先生が学生の間をまわってこられ、先生曰く「やってますな－」気がついてみると、この旅行の三分の二は女性で、それも家庭の主婦が多い。水割りを飲んでいるのは私だけ、飲めることがばれてしまったのだ。それからは旅行の間、飲むときはいつもお声がかかってしまった。

窓の外は真っ暗、ふと見上げるとオリオン座が輝いているではないか。さらに流れ星が二つ、なんと素晴らしいことかこの旅行が無事であることを祈った。

ロスアンゼルス、なんと夏！半袖のシャツで充分。雲一つない青空が広がっていた。デルタ航空に乗継ぎ、ツーソンへ向かうことになった。しかし、ここでアクシデント。読売新聞社からこのツアーを取材するため同行してきた記者のＩ氏と私、空港で迷子になってしまった。出口を間違えて空港の外へでてしまったのだ。しかたなく、インフォメーションで探してもらうことにしたが、Ｉ氏は英語が駄目という、しかたない！肝っ玉かあさん、意を決してデルタ航空の場所を聞いた。ちゃんと通じた、ちゃんとわかった。私のブロークンイングリッシュも役に立ち意を強くした。Ｉ氏をつれ、荷物を持ち、デルタ航空のチケットカウンターまでたどりついた。しかし、皆がいない、三十分ほど待ったときやっと現われた。デルタのカウンターが引っ越したため、みんなも迷子になっていたのだ。

ツーソンは砂漠の街、よく西部劇にでてくるような街で、高い建物はアリゾナ大学かホテルぐらいで、後は平屋で二階建ての建物はない。ホテルのレストランで小尾先生と夕食。大きな皿に大きなジャガイモと分厚いステーキがのっている英語で注文するのがなかなかできなくて、一人が注文するとみんな同じでいいとなり、結局同じ物を食べた。ビールはバドワイザーしか頼まない（これしか知らないから）。私はハウスワインをいただいた。飛行機の疲れもでて、みんなそこそこにベッドに入った。

つづく

編集後記

本年はニューイヤーパーティは行なわれませんでしたのでお知らせします。

もうすぐ卒業式があり、新会員を迎える季節で同窓会の活動も一層活発になります。今回より小山佐枝子さんの新シリーズが始まりました。大きな世界「宇宙」を中心とした長編で、それぞれの世界での葛藤を忘れるような、新しい視点の内容になるのではないかと期待しています。

会員の方から沢山の投稿を頂きありがとうございました。昨今の世相と同じように、会報も内実の強化をしたいと思います。政治・経済・文化等大きく変わる感のある時代ですが、皆様のご意見、ご感想、卒業後の活動状況等をご投稿していただき会報の内容や同窓会活動をさらに充実していきたいと思っています。